

仙台白百合短大 ○鈴木良子 東京家政学院短大 井澤尚子 宮城学院女  
大 塩谷節子 北海道教育大 斎藤祥子 共立女短大 新野静枝

目的 わが国の人口の高齢化は、急速に進んでいる。そのライフ・ステージ、特に、老年期に人間は、どのような色彩を生活の中に求めるのだろうか。本報では、高齢者の嗜好色と嫌悪色の調査結果を、全国のおよび、気候・風土・習慣等の違う地域別の二側面から分析し、その類似と差異を明らかにすることで、生活環境の違いが、老年期の色彩嗜好にどのように関与するのかを考察した。

方法 1) 対象 2008名 2) 調査時期 3) 手続 (1)、2)、3)は、1報と同様)  
4) 地域別 1群・472名(北海道、青森、宮城、山形)、2群・731名(埼玉、千葉、神奈川、新潟、山梨)、3群・565名(東京)、4群・240名(岐阜、京都、大阪)  
5) 観察条件 北窓昼光、晴天、照度800Lx以上、試料と目の距離30cm、垂直上方から観察  
6) 調査内容 嗜好色3色・嫌悪色3色を調査。

結果 嗜好色では、全国的にPB系が多く、地域別での差異はみられなかった。PB系の“明るい青、暗い紫みの青、群青色”に嗜好の集中がみられ、その他では、1群・4群はG系の“緑、暗い緑”2群・3群はP系の“明るい青紫、こい青みの紫”が好まれた。嫌悪色では、全国的にR系が多く“あざやかな赤、こい赤”に集中がみられた。地域別にみると、1群・2群はYR系の“チョコレート色、オレンジ”に片よりがみられ、3群では“灰”4群ではY系の“暗い黄、あざやかな黄”が嫌悪色である以外は、顕著な差異はみられなかった。したがって、老年期の色彩嗜好には、地域的な生活環境の違いが与える影響は、やや少ないことが判明した。